

学 位 論 文 題 名

母親の被暴力経験と子どもへの虐待的養育行為との
関連における Sense of Coherence (SOC) の
緩和作用に関する検討

学位論文内容の要旨

I. 研究背景と目的

我が国における児童相談所の児童虐待相談受件数は増加の一途をたどり、虐待の発生予防に関する研究は重要課題である。様々なリスク要因の中でも虐待者の被暴力経験は注目すべき要因である。虐待を受けた親の約3割がわが子を虐待するとされている他、夫からの妻への暴力(以下DV)と児童虐待との関連や、夫婦間暴力の目撃が子どもに与える心理的影響の大きさも指摘され、介入の困難さが課題となっている。

しかし、被暴力経験というリスクを抱えながらも健全な育児を営む親も存在し、虐待発生を緩和する要因が存在すると考えられ、この要因を明らかにすることが虐待予防のあり方に示唆を与えると考えた。本研究において、虐待の緩和要因として Antonovsky が提唱した Sense of Coherence(以下 SOC)に着目した。SOC は「首尾一貫感覚」と訳され、SOC の強い人は様々な出来事に対して個人の持つ資源を動員する力が強く、首尾よい対処が可能であることから健康を維持できうるとされている。親の被暴力経験と子どもへの虐待との関連に SOC がどのように作用するかを明らかにした論文は国内外ともに見られていない。

本研究の目的は、乳幼児期における母親の虐待的養育行為と被暴力経験との関連と緩和要因としての SOC の影響を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 研究デザインと対象

本研究は前向きコホート研究の一部である。対象は、2001年5月～6月の期間、札幌市内6か所の保健センターの4か月健診を受診した母親である。母親と子どもの基本的属性を尋ねた質問紙1500部を配布し、484人(32.3%)から郵送で回答を得た。この調査をベースラインとし、出産から10か月後、1年6か月後、3年後に郵送で追跡調査を行い、母親の虐待的養育行為、夫の協力への満足度、ライフイベントの有無について尋ねた。また、出産から1年後の時期に、幼少期の親からのひどい体罰経験、両親の身体的DVの目撃経験、産後1年間のDV体験、短縮版 SOC13項目について尋ねた。虐待的養育行為、暴力行為の頻度については、「ほぼ毎日あった」「週に2、3度あった」「月に2、3度あった」「1、2度あった」「全くなかった」の5検法で回答を求めた。

2. 被暴力経験群と虐待的養育行為群の設定

1) 夫からの被暴力経験とDV群の定義

平成13年度の北海道の「女性に対する暴力調査」を参考に身体的、心理社会的、性的暴力行為20項目を調べた。心理社会的暴力については反復していた場合をDV群とし、身体的、性的暴力は1度でもあった場合をDV群とした。その結果、DV群は69人(24.9%)となった。

2) 幼少期の親からの被暴力経験群の定義

幼少期の親からの体罰経験と両親の身体的 DV の目撃については、1 度でもあったものを被暴力群とし、体罰経験群は 93 人 (33.6%)、DV 目撃群は 92 人 (33.2%) となった。

3) 虐待的養育行為群の定義

平成 11 年度「首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書」を参考に、軽度、中度、重度の虐待的養育行為 14 項目を設定し、軽度は「毎日ある」もの、中度は「週に 2、3 度」以上あるもの、重度は「これまで 1、2 度」以上あるものを虐待的養育行為群とし、虐待的養育行為群は 69 人 (24.9%) となった。

3. 分析方法

目的変数を出産後 1 年 6 か月の母親の虐待的養育行為として χ^2 検定を行い、統計的有意差を示した項目についてロジスティック回帰分析を行った。さらに、被暴力経験と SOC の緩和作用を明らかにするために、被暴力の経験がなく SOC が高かった群を基準として、被暴力の経験があり SOC が高い群、被暴力の経験が無く SOC が低い群、被暴力の経験があり SOC が低い群のオッズ比 (OR) を算出し比較した。

IV. 結果及び考察

出産後 1 年の質問紙の回収数は 362 人 (追跡率 74.8%)、1 年 6 か月後では 355 人 (追跡率 73.3%) あった。全質問紙を回収できたのは 283 人 (追跡率 58.5%) であり、有効回答は 277 人 (追跡率 57.3%) であった。

1. 虐待的養育行為と被暴力経験の関連

単変量解析の結果、年齢、夫の協力への満足度、ライフイベント、SOC、幼少期の体罰経験と身体的 DV 目撃経験、DV 経験が統計学的有意差を示した。1 つの被暴力経験と年齢、夫の協力への満足度、ライフイベント、SOC を含んだモデルについてロジスティック回帰分析を行った結果、幼少期の体罰経験 (OR=3.85、95%CI:2.09-7.09)、両親の身体的 DV の目撃経験 (OR=1.92、95%CI:1.04-3.52)、出産後 1 年間の DV 経験 (OR=2.05、95%CI:1.08-3.88) は独立して虐待的養育行為のリスクを高めることが示された。

2. SOC の緩和作用に関する検討

ロジスティック回帰分析の結果、SOC が高い場合の OR は、幼少期の体罰経験を含んだモデルでは 0.45 (95%CI:0.24-0.84)、両親の身体的 DV 目撃経験のモデルでは 0.41 (95%CI:0.22-0.77)、産後 1 年間の DV 経験のモデルでは 0.41 (95%CI:0.22-0.75) であり、すべてのモデルにおいて独立して虐待的養育行為のリスクを低めることが示された。

被暴力経験がなく SOC が高い場合を基準に比較した緩和作用に関する分析では、体罰経験を持ち SOC が高い場合の OR は 3.73 であり、SOC が低くても体罰経験が無い場合 (OR=2.49) よりも高かった。しかし、DV 経験の場合は、経験があっても SOC が高い場合 (OR=2.54)、経験が無くても SOC が低い場合 (OR=3.26) よりリスクが低いとの結果を示した。SOC はストレスサーに首尾よく対処する力といえるが、DV と子どもへの虐待の関連の背景にはストレス反応が介在するのに対し、被虐待経験の連鎖の背景は、ストレス反応のみでなく養育行動を学習的に獲得する側面を持っており、このような側面に対し SOC の作用は少ないと考えられた。しかし、いずれの被暴力経験についても、被暴力経験があり SOC が低い場合は最も OR が高くなる (体罰経験の場合 OR=12.01、DV 経験の場合 OR=5.60) との結果であったことから、SOC は被暴力経験に緩和的に作用することが明らかとなった。

1996 年に米国の Litty らが母親の被虐待の既往と子どもへの虐待におけるソーシャルサポートの緩和作用を明らかにし、SOC については 2000 年にスウェーデンの Krantz らが、女性の被暴力経験と一般的心身症状における SOC の緩和作用を明らかにしたが、SOC と子どもへの虐待との関連を明らかにした研究は行われていなかった。本研究では、質問の性質上、対象者の心象を害する可能性を倫理的に配慮し、答えにくい質問には答えなくても良いことを保証したため追跡率が低い結果となったが、SOC が被暴力経験と子ども虐待との関連において緩和的に作用することを初めて明らかにできた研究となった。

以上の結果から、SOC は虐待の発生や再発の予測に役立ち、乳幼児期のハイリスク家族のスクリーニングや虐待問題を抱える家族の支援方針の指標に有効といえる。そして、SOC を高める支援が今後の子ども虐待の防止活動に有効であることが示唆された。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 岸 玲 子

副 査 教 授 有 賀 正

副 査 教 授 前 沢 政 次

学 位 論 文 題 名

母親の被暴力経験と子どもへの虐待的養育行為との 関連における Sense of Coherence (SOC) の 緩和作用に関する検討

この論文の目的は、乳幼児期における母親の虐待的養育行為と被暴力経験との関連と緩和要因としての Sense of Coherence(以下 SOC)の影響を明らかにすることである。わが国においても、児童虐待の増加は重要課題であり、特に虐待死亡事例の 5 割が乳幼児であり虐待者の約 5 が実母である状況を踏まえると、乳幼児期の母親を対象としていることの意義は大きい。今回、申請者が緩和要因として着目した SOC は「首尾一貫感覚」と訳され、健康を促進する要因として保健医療分野でも注目されている概念である。また、この論文が着目している親自身の被虐待の既往、夫から暴力（以下 DV）、両親の DV の目撃経験などの被暴力経験は介入が非常に困難であるリスクであり、この点からも、被暴力経験と虐待の緩和に着目したことの意義は大きいと考えられた。親の被暴力経験と子どもへの虐待との関連に SOC がどのように作用するかを明らかにした研究は国内外においても行われておらず、虐待予防活動に新たな示唆を与える研究と考えられた。

研究方法として、前向きコホート研究を用いており、4 か月健診を受診した母親に質問紙 1500 部を配布し回答を得た 484 人（回収率 32.3%）を対象とし、出産から 1 年後に幼少期の体罰経験、両親の身体的 DV の目撃経験、産後 1 年間の DV 体験、短縮版 SOC13 項目を、出産から 1 年 6 か月後に虐待的養育行為、夫の協力への満足度、ライフイベントの有無を尋ねている。倫理的配慮から回答拒否を保証したため、全質問紙を回収できたのは 283 人（追跡率 58.5%）、有効回答は 277 人（追跡率 57.3%）と追跡率は低い結果であったが、ロジスティック回帰分析を用い交絡要因を調整したオッズ比（OR）を算出し、さらに、SOC の緩和作用を明らかにするため、SOC と被暴力経験を掛け合わせた交互作用に関する分析も行っており、研究手続きは妥当と考えられた。

分析の結果、幼少期の体罰経験がある場合の OR は 3.85、両親の身体的 DV の目撃経験は 1.92、出産後 1 年間の DV 経験は 2.05 であり、虐待的養育行為のリスクが高まることが示された。SOC が高い場合は、どの被暴力経験がある場合でも独立して約 0.4 倍虐待的養育行為のリスクが減少することが示された。さらに、被暴力経験と SOC の交互作用に関する分析では、体罰経験を持ち SOC が高い場合の OR は 3.73 であり、SOC が低くても体罰経験が無い場合 (OR=2.49) よりも高いことが示されたが、DV 経験の場合は、経験があっても SOC が高い場合 (OR=2.54)、経験が無くても SOC が低い場合 (OR=3.26) よりリスクが低いとの結果が示された。この違いについて、申請者は、体罰経験と虐待的養育行為の関連のような学習的伝達に対しては SOC の作用は少ないとし、SOC の緩和作用に関する考察を深めていた。しかし、いずれの被暴力経験についても、被暴力経験があり SOC が低い場合は最も OR が高くなる (体罰経験の場合 OR=12.01、DV 経験の場合 OR=6.80、身体的 DV の目撃経験の場合 OR=5.60) との結果であり、SOC は被暴力経験に緩和的に作用することは明らかであると結論している。分析手続きならびに結果からの考察の論旨は妥当であると判断された。

審査では、副査の前澤教授から SOC 概念と基本的信頼感の類似性と乳幼児期の生成過程、家族における育児支援の課題について、副査の有賀教授から SOC スケールの信頼性、SOC と被虐待の既往の関連性、SOC と心身症疾患との関連について、主査の岸教授から前向きコホート研究の意図、追跡率の低さと一般化における課題について質問があった。申請者は、先行研究や研究結果を引用し概ね妥当な回答をしていた。

審査委員からは、この論文は虐待が増加するなか母親自身の過去の被暴力経験と現在養育している児への虐待行為との関連における SOC の緩和作用を国内外で初めて実証的に明らかにした論文として高く評価される。特に今後、論文のなかで提言された SOC の臨床への活用は、新しく虐待予防対策の一つに取り入れることが可能であることが強く示唆される研究になった。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども合わせ申請者が博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。